児童の人物描画における年齢、性、国籍の特徴抽出の手がかりに関する研究（1）
－カテゴリー一致得点による分析から－

○平沼博将　（福山市立女子短期大学保育科）
子安増生　（京都大学大学院教育学研究科）

【目的】

本研究は、日英児童の人物画データ（Cox, Koyasu, Hiranuma,& Perara,2001）を用い、人物画を描いた児童の国籍、年齢（学年）、性別を推定（判断）する際、何を手がかりに行われているのかを明らかにすることを目的とする。

【方法】

＜被験者＞ 日本人大学（院）生48名（平均年齢24.4歳：男女同数）

＜材　料＞ 描画刺激：Cox, Koyasu, Hiranuma,& Perara(2001)のTask2の描画（「右の方に向かって走っている男性」）240枚および同Task1の描画（「まっすぐ正面を向いて立っている男性」）24枚（練習課題用）／実験機材：ﾊﾟｰｿﾅﾙｺﾝﾋﾟｭｰﾀｰ／19ｲﾝﾁCRTﾓﾆﾀｰ／ﾏｳｽ

＜課　題＞ ①国籍判断課題：児童の国籍(日本、英国)、②学年判断課題：児童の学年(1年、5年)、③性別判断課題：児童の性別（男、女）をそれぞれ判断させる課題を実施した。

＜手続き＞ 予めランダマイズした240枚の描画刺激を順にモニターに提示し、各描画を描いた児童が「日本人」か「イギリス人」か（国籍判断課題の場合）を５段階で判断してもらった。各課題とも練習課題を行い、また、刺激提示の制御、被験者の反応の記録および反応時間の測定には、Microsoft Visual Basicにより自作したプログラムを用いた。

【結果と考察】

被験者の反応からカテゴリー一致得点（１点～５点）を算出し、各課題における国籍、年齢、性別による影響を調べた（Fig.1～3）。各課題ごとに、国籍×年齢×性別の３要因分散分析を行った結果以下の通りとなった。

①国籍判断課題では、国籍($p<.05$)、学年($p<.05$)、性別($p<.001$)の主効果、および国籍×学年($p<.001$)、国籍×性別($p<.001$)の交互作用が認められ、日本の５年生、および日本の女児の描画の一致得点が高いことが分かった。

②学年判断課題では、学年の主効果($p<.001$)、および国籍×学年($p<.01$)、学年×性別($p<.001$)の交互作用が認められ、英国および男児の描画において学年差が顕著であることが分かった。

③性別判断課題では、国籍($p<.001$)、性別($p<.05$)の主効果および国籍×学年($p<.05$)、国籍×性別($p<.001$)、学年×性別($p<.01$)、国籍×学年×性別($p<.01$)の交互作用が認められた。つまり、国籍に関しては、全体として英国よりも日本の描画の方が一致得点は高かったが、男児においては有意差がみられなかった。また、学年に関しては全体として学年差は見られなかったが、日本女児、英国男児の描画については５年生の描画の方が一致得点が高かったのに対して、英国女児の描画については１年生の方が一致得点が高かった。性別に関しては全体として女児よりも男児の描画の方が一致得点は高かったが、英国では女児よりも男児の描画の方が、逆に日本では男児よりも女児の方が一致得点が有意に高くなるという結果になった。

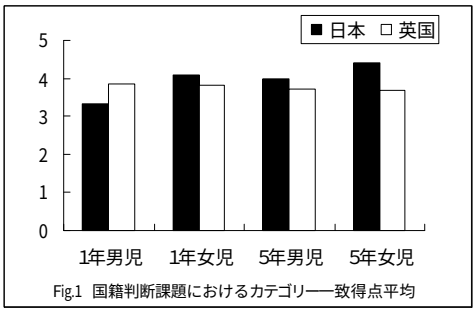

Fig.1 国籍判断課題におけるカテゴリー一致得点平均

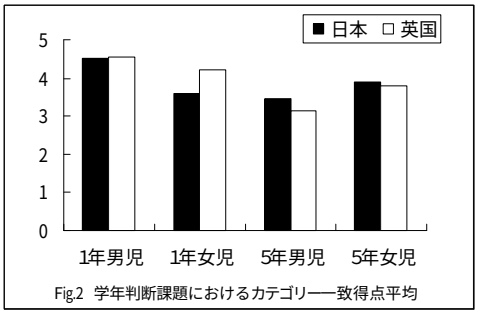

Fig.2 学年判断課題におけるカテゴリー一致得点平均

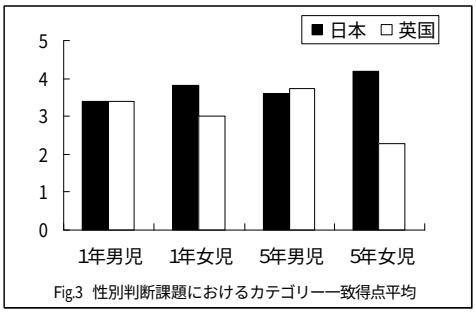

Fig.3 性別判断課題におけるカテゴリー一致得点平均